



名大トピックス

No.131 平成16年4月20日発行 国立大学法人名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

平成15年度卒業式が挙行される 新たなるキャッチアップ - 負の遺産を超えて -



CONTENTS

・平成15年度卒業式が挙行される.....	2	・訃報 飯島宗一元学長逝去.....	20
・総長の辞(2004年大学院修了式).....	3	・遠山前文部科学大臣が本学を視察.....	21
・総長の辞(2004年学部卒業式).....	8	・博物館が平成15年度地域貢献特別支援事業を実施する.....	22
・来賓祝辞.....	13	・公益信託田島毓堂語彙研究基金が設立される.....	23
・第 期名古屋大学運営諮問会議(第4回会合)が開催される...	15	・太陽地球環境研究所が陸別町と社会連携連絡協議会を開催...	24
・エコトピア科学研究機構設立プレシンポジウムが開催される...	16	・博物館が「おもしろ博物学～東海から学ぶ～」を開催.....	25
		・法人化に向けての準備状況に関する説明会が開催される...	25
		[INFORMATION]	
		・イベント等の開催予定一覧.....	26



・「糖鎖」の謎に挑む

北島 健.....

18



平成15年度卒業式が挙行される

平成15年度名古屋大学卒業式が、3月25日(木)豊田講堂において、挙行されました。午前10時からの修士・博士学位記授与式に続いて、学士学位記授与式が午前11時50分から行われ、会場の豊田講堂は、3階席まで卒業生で満員となりました。

名古屋大学交響楽団による「ニュルンベルクのマイスターズinger」前奏曲の演奏で始まった式典では、松尾総長から学部卒業生2,217名に学士学位記が、大学院前期課程修了者1,558名に修士学位記が、後期課程修了者262名に博士学位記がそれぞれ授与されました。

松尾総長は、大学院学生及び学部学生に対し、それぞれはなむけのことばを贈り、人生の新たなスタートを切る卒業生たちを激励しました。

また、大学院経済学研究科博士課程後期課程修了生の浅野英幸さんが、修了生総代として、また、経済学部卒業生の竹尾幸介さんが、卒業生総代として、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の柴田昌治氏(日本ガイシ株式会社代表取締役会長、日本経済団体連合会副会長及び本学経営協議会委員)から祝辞をいただきました。

式典終了後には、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちから花束を贈呈されたり、胴上げされたりする卒業生の姿があちらこちらで見られました。また、卒業生は、友人や後輩、保護者などと晴れやかな表情で記念撮影をしていました。

なお、式典の様子は、シンポジオンホール及び豊田講堂ピロティにおいてライブ中継され、詰めかけた保護者らがスクリーンに映し出される映像を熱心に見つめていました。

また、この模様は、昨年、一昨年同様、インターネットでもライブ中継されました。映像は、編集され、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/>)でも視聴できます。



総長の辞（2004年大学院修了式）

松 尾 稔

名古屋大学は、本日ここに平成15年度大学院前期課程修了者1,558名に修士学位記を、後期課程修了者262名に博士学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに教職員を代表して心からのお祝いを申し上げます。私は、常々、大学は国際公共財だと申しておりますが、これに相応しく、この場には、異なる国々からの多くの方々が出席されています。

皆さんは、博士課程において、前期、後期を問わず、学習や研究を通して、多くの経験を積まれたに違いありません。昨年の修了式においても同様のことを申しましたが、学問や研究には完璧な頂点とか終点はありません。すべてが人生における節目、節目となる通過点です。いかに優れた成果であっても、そこへのプロセスの中での一つのマイルストーン（標石）とでも言うべきものであります。このようなことは十分自覚されていることと承知しています。しかしそうとは言え、多分、紆余曲折、長い間苦勞して成し遂げた学問的、技術的成果が着実な礎石として実を結んだ満足感に浸りつつ、今、皆さんは、これから始まる新しい生活に対し、青春の気概に満ちた、澁刺とした気分でごここに出席されているものと信じます。

今後、皆さんは、それぞれ異なる道を歩まれますが、いずれにしても、教育研究者を含む高度職業人として自立しようとしている方々です。次なる目標を高々と掲げ、一層の研鑽を積んでいただきたい。皆さんの将来が、明るく、大きく拓けていることを祈念し、そのスタートラインにつかれたことに対し、心からの拍手を送ります。

さて、今年の修了式は私個人にとっても格別の感慨があります。あと1週間後の3月31日をもって満6年の任期を終え、本学を卒業いたします。つまり、私が



国立大学としての名古屋大学最後の総長ということになり、また本日の式辞が私にとり最後の修了式式辞となるからであります。こういう事情から、今回は特別な気持ちで、過去に述べた式辞を読み返してみました。総長就任後の6年分はもちろんですが、もっと前のものがもう一つあるのです。実は、私は平成3年度の修了式にも、急逝された早川幸男学長に代わり、学長事務取扱として式辞を述べています。その原稿をつぶさに読み返してみますと、そこでは、産業革命以降の主としてイギリスを中心とした欧米先進諸国の歩みと日本を比較し、残された負の遺産にも触れつつ、我が国の将来への展望と教訓を述べています。ここ数年の式辞も、その年、その年によって取り上げている課題や話題に違いこそあれ、その組立てや思想は本質的に同じです。自己の人生観は、ドラスチックな出来事でもなければ短期間で変わりようがありませんから、当然と言えば当然であります。いつも、まず過去を振り返り、現在を直視し、そして未来について語っています。

前置きが少し長過ぎましたね。皆さんにとってはもちろん、私にとっても記念すべき特別の日ですから、

考えあぐねた末の結果だとして以下、ご了解下さい。いつもですと、一貫した筋書き - いわばストーリー性 - に拘り、苦勞していますが、今日は、主として「近未来社会」のことを念頭に置きつつ、肩の力を抜いて、極端に言えば思いつくままに語ってみたい。だから皆さんも筋書きを追わずに、気持ちを軽くして聞いて下さい。何か参考になることを見つけて下されば、私としては大変ありがたい。

私が未来の「何か」を考える時、習慣になっている思考順序は以下のようです。まず第一に、その対象 - 事物や組織など - の将来の「存在価値と理由」、そしてもしそれがあれば、その「理想像や理念」を考える。具体例で申しましょう。私たちは、他大学に先駆け、すでに4年前に「名古屋大学学術憲章」を策定しました。全学の合意のもと印刷物になるまでに1年半の議論が続きましたが、私が最初に問題にしたのは「名古屋大学の将来の存置（在）価値とその理由」でした。これが否定されるならば、100年、200年先の理想像はおろか、理念に基づく、名古屋大学の年次の将来構想を描くことはできません。これは、対象が学問でも、産学官共同でも、未来の都市であっても同じであります。この作業は言うほどに易しくはない。これから取りかかろうとする対象の「存在価値とその理由」を考え抜き、結論を得るのは実に難しいものです。

皆さんはすでに経験したかも知れませんね。しかし、



まだやったことがないならば是非試みて下さい。将来高度専門職業人として必ず必要になると思うからです。特定の個人的な研究では、「興味」こそが先行すれば十分だ、と大きな声で喧伝する向きもありますが、100歩引いて、それは「天才」には許されるでしょう。しかし近年、国民の負担、例えば税金を使わない研究や自己の人生などありえないことに思いをいたせば、広い意味での感謝と社会への還元の気持ちを持つことなく、「興味」先行を言い訳にする癖をつけてはいけません。

さて、全力を挙げてやってみる価値が見つかったら、次に、私は「過去」を振り返ることにしています。嘗て、食事中の会話の中で、桑原武夫先生から何気ない調子で、「過去の歴史を問題にしない学問分野は必ず減るなあ」と聞いたことが、強烈に頭に残っているからです。確かに、“過去がない、全く新しいモノ”を見つけたように思える時も、人もいます。しかし、よくよく辿っていけば、必ず過去に「糸口」をつけた人や時代があるものです。それを知ってびっくりします。「温故知新」という戒めもあります。自惚れてはいけません。

社会的諸問題を考える時、欧米先進諸国が200年以上かけて今日の高度技術社会に到達した道のりを、我が国は50年で駆け抜け、また途上国の先頭を走る中進国は20 - 30年で突っ走ろうとしています。現在、我が国のほとんどの製品は、品質上高位にランクされていますが、わずか50年前までの「made in Japan」は「安物」の代名詞でした。また50年前、すでに私たちには高級品として写っていた「made in Germany」は、ビスマルクが長期間かけて計画的にイメージチェンジを図るまでは、「安い粗悪品」の代名詞でした。私たちは、自国の現状を考える時、あるいは発展途上国との比較でものごとを考える時、このような過去への視点を決して忘れてはいけません。

皆さんのご両親や祖父母の方々は、 - 私自身もその年代に入りますが - 本当の貧しさから、今日の、正に先端的な高度技術社会への道のりを、その利点と負の遺産も含めて、実体験として知っています。この世代の、



いわば“生身”の人間が、これほど多く現存しているのは、地球上で日本だけあります。日本の体験を振り返り、また語ることは、自己反省、現状分析の上で必須であることはもちろんだが、発展途上国の人たちを励まし、また助言を与える義務として捉える必要があるのではないのでしょうか。

さて、話を戻しましょう。まず第一に、「存在（あるいは実現）価値」が見出せ、そして第二に、今述べたような「過去」が学習できたならば、次の段階は「現状」、すなわち「現実の姿」の分析でしょう。最終的な理想像に至る何段階かの「将来像」と「現実」とのギャップを分析し、政策・経済・技術等に関する課題を抽出しなければなりません。

書いていけばこんな風になるのですが、賢明な皆さんは、ここに到ってすでに気付いておられるでしょう。そうです。今申し上げた「現状分析および将来の理想像への課題抽出」と、そしてそこに至る何段階かの、いわゆる「将来目標や計画」とは、不可分の事項として考えていかなければなりません。最近、好むと好まざるとに拘わらず、大学の法人化を目前にした私たちの周りには、「将来目標やそれを達成するための計画」に関して「長期、中期、短期、実行」といった用語があふれているので、ここでもこれらの言葉を使っておきましょう。

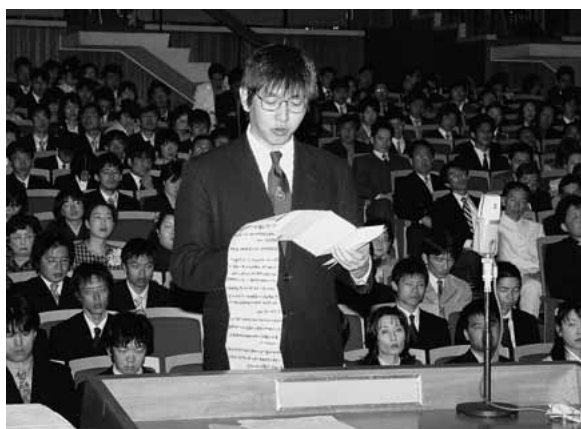
長期、中期、短期と言っても、実現しようと掲げている対象によって、その時間的スパンが異なってくるのは当然です。100～200年を長期、40～50年を中期、

5～10年程度を短期、それ以前の期間は詳細な行程表を伴ったアクションプラン（実行計画）と呼ぶのが相応しい対象もあれば、それぞれ、長期が3年、中期が1年、短期が2ヶ月、もし実行プランをたてるとすればそれは10日間だ、という対象もありうるでしょう。前者の典型的な例は、土木構造物など社会資本形成を含む「国創り」や、私たちが直面している「教育研究に関する諸問題」などであります。また、ある特定分野の研究や技術課題には、後者のような場合があります。いずれにしても、常に進化性を持ち、より良い方向への“舵切り修正”のための柔軟性を持たせつつ、それ相応に“具体性”をもった目標と計画が必要であります。無駄ごとばかり要求し、労多くして益のない、“バカげた”評価ではなく、「適切な評価」が要求されることも論を待ちません。

たまたま個人が対象になる場合でも、“私自身の人生だから、そんなにガミガミ言わないでもらいたい、なるようになればよいのだから”などと言わないでいただきたい。ここに参加している皆さんは、高度専門職業人としてスタートしようとする方々であり、私はそのような皆さんを相手に話しているつもりだからです。職業上の専門職として「犬も歩けば棒に当たる」というほどに、世の中は甘くないのであります。

さて、ここまでは思いの他筋書きがありましたね。述べたいことは沢山ありますが、これから先は、冒頭





における約束どおり、思いつくままに、しかしながら、これまでの話と関連させつつ、残り少ない時間を使わせて下さい。

今はまだ実感として湧いてこないでしょうが、今後の皆さんにとって、長期目標として100年前後の期間を考えるべきケースが、以外に多く生じてくるに違いない。その時忘れてはならない「前提」があります。まず第一は、動物として「自己は必ず死ぬ」ことを自覚しつつ、すでに自分のいない筈の100年先のことを真剣に考えるのは人間だけだ、という点です。だからこそ、例えば3世代、4世代先の人たちとの共有財産である「良き環境」の在り方などを本気で考えようとするのであり、またそれこそが現在を生きる私たちの責任でもあるわけです。当然といえば当然ですが、以外に忘れがちになる点です。

第二番目は、人口問題です。資源・エネルギー・食糧・水、そして結果的に地球の平和を考える時の、すべての基礎となる課題です。世界全体を対象とする問題ならば、世界の人口を考えるべきです。現在、63億人、中位推定で2050年には89億人、2100年には94億人と、増え続けます。地球規模であっても、ある特定の地域問題を考えようとするならば、それなりに、基礎認識としてその地域の人口推定が必要でしょう。では、日本国内の諸問題を考えるべき時はどうでしょうか。

私の経験では、日本は、特に第2次世界大戦敗戦後、継続的に経済成長期を過ごす中、誰もが、“いつまでも、

すべてのものが「増加」していく”と、錯覚してきたように思います。冷静に見れば、20年も前から、やがてすべてが減少の方向に向かう、ことが明らかであったにも拘わらず、であります。「成長」というのは恐ろしいことです。日本の人口は2007年に1.3億人近くになりますが、その後は、中位推定で2050年は1億人、2100年には6400万人と、ピーク時から半減すると予測されています。6400万人は楽観に過ぎるのであり、5000万人を割るだろうという論者もいるほどです。

挙げれば、枚挙にいとまがありませんが、以上2つの「前提」は、長期にもの考える場合、大変大切なことだと思っております。

時間が少なくなってきました。あと二、三よく使われる「用語」を出してみましよう。

皆さんは、近年、目標・計画などに関するあらゆる場面で、「戦略」という用語をしばしば見聞するでしょう。すでに使っているかも知れませんが、将来必ず職場で使うことになるでしょう。しかし、本気で考えるとこれは仲々難しい言葉です。皆さんは、どんな風にこの用語を消化していますか。私も時々使いますので、参考のため、私の自己流の解釈を示しておきましょう。

「戦略」という用語には、次の3要素を含むことが必要だと考えています。第一に国際性を含む「広域性」、第二に先見性を含む「長期性」、そして第三には経済・社会・政治・文化の多分野を視野に収めた「総合性」



であります。

「現状分析」についても先に触れました。「分析と設計」とが、分離せずに使われ、混乱させられて困ってしまうことがよくあります。特に文系の人の場合に多いので、ご注意願いたい。もちろん、両方とも重要です。しかし「分析」だけでは、例えば「技術」にはなりません。「設計」とは具体的に、可能な方策を策定し、実行に移しうるようにすることです。

また「将来構想」に関連して、皆さんの多くは、上司や関係の人たちから、それはそれは多くのことを言われ、求められるでしょう。私の周りでしばしば起こっていますから、ふと考えるだけでも二つ、三つはすぐに浮かんできます。いくつも述べる時間はないので、一つだけにしておきます。それは、“リーダーになれ”、“リーダーシップをとってもらいたい”という求めです。これは名古屋大学という基幹総合大学の、しかも大学院を修了していく皆さんにとっては、宿命というべきかも知れません。しかし、このことも、言うほどに容易いことではありません。大変、大変難しいことです。これまで、多くの人がその人なりのリーダー論を述べています。私も沢山読み、また聞きましたし、私自身の考えもあります。ここでは、私が先達から学んだこと、また私なりに考えていることを二、三述べておきます。

私は学生時代山岳部に所属していましたので、特に、日常的に「リーダー論」が部室で戦わされていました。そんな中で、今西錦司先生に教えられたことが強く印象に残りました。先生は、晩年の著書にも書いておられますが、リーダーに求められるのは、(一)に「人格・人柄」、(二)に「先見性・洞察力」、(三)に「常に責任をとる覚悟が出来ていること」と言われました。特に、(三)番目のことを身につけるためには、“相当の訓練が必要だ”と笑いながら言われたことが、その後の私の人生の中で、いつも、重く、心に沈みこんできました。

「人のいやがることをやらねばならない」、「少数意見を述べよ、マジョリティにつくな」と言われたのは、確か、リー・クワンユー前シンガポール首相だったと

思います。

社会にはいろんな人が必要であり、リーダーばかりいても世の中は成り立っていかない、と冷やかに言う人も多いし、一理はある。しかし、私は、すべての人が、自分自身の個人的問題も含む、何らかの世界や、環境の中で、必ずリーダーにならねばならない時がある、と思っています。そのような意味で、私は、例えば次のようなことを自分に言いかけさせています。“先達の仕事に敬意を表し、しかし踏襲せず、自己の道を探せ”、“流れに棹さし、凜とした志で自己の流れを作れ”、“自分がしたいことを、他の人がしたいことだと思ったてもらえるようになれ”と。

皆さん、是非、自分流のリーダーシップ論を作って、実行してみてください。

式辞にしては、特に終わりの方は、やはり、型破りに過ぎたかな、と心配です。何か一つでも皆さんの心に残ったであろう、と信ずることにいたします。

今後、皆さんには失敗も挫折もあるに違いない。しかし、怯んだり、まして恐れたりしてはいけません。それは、青春の気概に満ちた皆さんには似つかわしくありません。年齢をとって振り返ってみた時、どれもこれもが人生を鮮やかに彩る事象であった、と思返せるような、生き活きとした人生の新たなスタートを切られることを心から期待しております。

以上をもって、大学院修了生への辞といたします。



総長の辞（2004年学部卒業式）

松 尾 稔



名古屋大学は、本日ここに平成15年度の学部卒業生2,217名に学士の学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに、本学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。皆さんの中には、大学院へ進学される方々が約半数の1,090名、また就職者や独自の道を歩もうとされている方々が約半数おられます。それぞれの進路には意義こそあれ、もちろん何の差別もあろう筈がありません。とは言え、大学院重点大学としての本学の性格上、博士課程への進学者が多いのが特徴であります。他大学等から本学へ進学してくる人たちも加えますと、ここ2,3年、すでに大学院入学者数が学部入学者数を超え、今年度は全学生の約40%になっていますので、来年度も多分そのようになろうかと思えます。

さて、皆さんは、名古屋大学で過ごされた学部学生の期間、それは医学科の学生にとっては6年間、他のほとんどの人たちにとっては4年間でありましょうが、若き日のこの貴重な時期に多くのことを学ばれたに違いありません。楽しいことも数多くあったでしょうが、半面、学習や人間関係上の深い苦悩もきつとあったに違いない。しかし、これこそ、皆さんの年頃にのみ与えられた、「肉体の若さ」と「心

の若さ」の併存した、いわば「真の青春時代」の証でもあります。本日は、大学卒業という人生の一つの節目を迎えた満足感に浸りつつ、それぞれに、これから始まる新しい生活に対し、青春の気概に満ちた、澁刺とした気分で、今、ここに出席されているものと信じます。皆さんの高揚した気持が、この講堂に満ちて、私にも強く伝わってまいります。皆さんの将来が明るく、大きく拓けていることを期待し、そのスタートラインに着かれたことに対し、心からの拍手を送ります。

冒頭に紹介したように、皆さんのうち約半数の方々は大学院において学生生活を継続され、一方、残りのほとんどの人たちは、職業人として働き、所得を得る生活へと進まれます。今後何年間かは、互いに随分違う環境での生活になりましょうから、私は卒業式においては、いつも皆さん両者にとって、共通と思われる課題を取り上げ話す努力をしております。

とは言っても、私が皆さんに送る辞の本質は変わりようがありません。平成時代が始まった頃と、ここ4,5年を比較すると、主として我が国の経済状況に依存する社会の活性度や熟成度がかなり異なっているのは確かであります。また、この数年においても、細かく見れば、いろんな変化が認められます。したがって、卒業式で取り上げている具体的問題は、その年々によって種々異なりますが、私の根本的な考え方、やや大げさに言えば、自己の人生観は短期間で変わりようがありません。

私が卒業生に対し、変わらず述べていることは、まず第一に、大きな流れとしての世界や日本の変化、それに対する認識の重要性とそれへの対応の在り様についてであります。第二点目は、さらに本質的なことです。人、特に日本人の寿命は随分伸びたとは言え、私たち人間が生きている時間の短さ-宇宙や地球の歴史に比べての短さ-に対する

自覚と、それ故に、後の世代の人たちのことをしっかりと念頭において、懸命に生きることの貴さについてであります。今年も同じ観点に立って話してみたい。

ただし、個人的なことに亘って恐縮だが、今年の卒業式は、私にとって特別の感慨があります。私が卒業式で式辞を述べるのは、実は今日が7回目となります。最初は平成3年度の卒業式でした。当時の早川幸男学長が急逝され、私が学長事務取扱として式辞を述べました。その後は、平成10年に総長に就任して、今回が6度目であります。つまり、本日も入れてあと一週間で、私は満6年の任期を終え、皆さんと同じように、無事卒業となる筈ですから、今日の式辞が私にとっても最後のものとなります。

これまで、「卒業式の式辞」とあって、私も少しばかり肩を張っていたように思います。しかし今日は、できるだけ易しく語りたい。自分としては、「式辞」というより「語り」の気持ちで話したいと思っています。しかし先に述べたように、時代を追いつつ、過去の実態を振り返り、「温故知新」と言われるように、現在を直視し、将来の在るべき姿-それは「願望」と言うべきことかも知れませんが-を語りたい。この姿勢は一貫して変わらないつもりです。

さて、今、「式辞」というより「語り」だと言いました。一面的、限定的ではありますが、私の知っている過去や現在、つまり自分史の一部とも言うべき実体験を話したい。自然の恵みや労働、仲間への思いやりや地域住民同志の助け合いなど、ひいては、環境との共生、地球規模での社会的ルールなど、一つでも二つでも、皆さんの心に残せるもの、参考になるものがあれば、本当に嬉しい、と今思っております。

私は小学生までの多くの日々を京都府下の山村で育ちました。小さな頃から、田植え・稲刈り・草取りといった田の仕事を手伝いましたし、下刈り・柴づくり・枝打ちや間伐といった山仕事も、祖父母を含む家族と一緒に一日中、また小学生の頃は学校から帰ったらすぐに働きました。小学校の1年生でも、2年生でも、3年生でも、子供たちは皆、そうやって働いていたわけです。このように、特に田舎で育った人間は、仰々しく「自然との共生」などと言わなくても、実際の環境がそうなっていました。このような状況は、第2次世界大戦後もだいたい長い間続いたと思っています。

普通私たちの周りにある山は、ほとんど里山です。主として都会育ちの、しかも自分で経験したことのない戦後世代の多くの人たちが、教条的に“自然を守るため山には一切手をつけちゃいけない!!”などという。私は、“もんべ-この頃はトレパンとでも言いますか-でも履いて、まず下刈りぐらいから始めて下さい。”と言いたい。山というのは、大変手間がかかります。間伐もやらねばならない。そうすることによって、自然と共に生きていく、ということの子供の頃から悟るわけです。

私の家では鶏を20羽ぐらい飼っており、夕方になると鶏小屋の竹戸を開き、餌の在りかに向かってバタバタと走る鶏を追うわけです。その後、今日は卵をいくつ産んでいるだろう、とワクワクしながら鶏小屋に入って行くのです。1つだけの日もありますし、多い時は3つぐらいありました。お正月のようなハレの日には鶏を、私たちは“つぶして”と方言で言っていました。大家族みんなで食べる。これも自然の恵みの一つですが、無意識のうちに感謝の気持ちが身についてくる。

ことほどさように、農家の子供は貴重な労働力であり、田畑、山林、家畜は手間のかかるものです。他人の家の松茸山には決して入ってはいけないこと、山村で生きた魚といえば川魚しか知らない子供たちに、鮎だけは勝手に捕ってはいけないことを、しっかり教えるのは大人の役割でした。子供社会にも、それなりのルールがありました。遊びについてはもちろん、喧嘩にも手加減というものがあるし、





“走り一着”、“皆勤賞”、“喧嘩大将”などは、それぞれ尊敬の対象でした。このようにして、私たち子供は、子供の分担や責任、大人の思いやりや責任を通して、自然と共に生きる自覚、今言うところの“共生や自然の恵み”を身体で覚えたのであります。漁村であれ、街育ちであれ、基本的には大同小異だったと思います。

子供の頃から自然を大切に環境づくりを、人のせいにならず、大人は自分自身で、本当に真剣に考えるべきだと、反省しきりです。

「地域の連帯感」についても少し触れておきたい。私が住んでいた農家の屋根は茅葺きでした。長い間蓄えていた茅で、40年～50年に一度屋根を葺き替えるのです。それは、それは大変な労働力と技術を要します。一つの家族ではとてもできません。その地域の者が全部出て、一軒の家の屋根を葺き替える。田植え、稲刈りを助け合うこともあったし、田や飲み水の川からの引き方、広い意味での治水や利水の問題も全部、地域の助け合い、連帯感をもってやっていました。戦時中や敗戦後は、厳しい食糧難でしたから、お互い助け合うのは普通でした。

中学生以降私は共稼ぎの両親と京都市内に住んでいました。貧しい頃で、生きていくためにみんな一所懸命働いていますから、その意味で“共稼ぎ”は当たり前です。家には一応鍵が掛けてありましたが、その鍵は隣近所に預けておく。急に雨が降ったりすると、鍵を開けて家に入り、干してある洗濯物を取り入れておいてくれる、という風です。私は3人兄妹で、下の妹はまだ2、3歳でした。現在のよ

うに乳児に近い頃から預かってくれる託児施設はありませんから、隣近所で預けたり、預かったり、というのは普通でした。このような環境が良いとか、悪いとかを言っているではありません。皆様のご両親、祖父母の方々は、多かれ少なかれ経験されていることであり、子供心に他人に対するマナーや、“世は持ちつ持たれつ”だと学ぶ社会があった、と言っているのです。ともかく、このような意味で、地域住民の連帯感是非常に強いものでした。

豊かになると共に、「集団」より「個」が強調されるようになりました。高層住宅の住民になると、私自身も経験しましたが、特に勤め人は隣の人の顔も知らないのがむしろ当たり前で、“連帯”などという言葉すら、忘れてるようにみえます。それはそれでまた良い点もありますが、せめて、周辺をどのようにして住みやすくするか、街の環境を良くするためにどうするかくらいは、共に考えた方が良いでしょう。近年、自然発生的なボランティアの集まりやNPOなどを中心に、まずは近くの公園から始めて次第に市街地へ、さらには川や港を美しくしようとする運動が、目に見えて広がってきたことは、嬉しい限りです。広い意味での生活環境すべてに亘って、多くの事例が出てきました。政治や行政が何かしてくれるのを待っているのではなく、自分たちが自ら示し、政治・行政を動かすことこそが求められる時代になってきたと思います。

東海地震を初め、東南海、南海地震の発生確率が現実味を増して高まっている現在、日本にとって地震防災は極



めて重要な課題です。地震に対し、物理的な抵抗力、つまり、耐震的な構造物のみで対抗しようなどと考えるのは駄目です。自然の力は偉大です。公共構造物に限っても、そして税金をいくら高くして補強したとしても、その破損、崩壊を完全に防ぐことはできません。私たちは、地震発生後の被災の程度をいかに軽減するかを考えるべきです。その重要な方法の一つに、その地域、地域における連帯と常なる訓練があります。地域の連帯性と協力関係が非常に大切です。私の専門の一部は防災工学であり、これまでに多くの論文を書き、講演も講義もしてきました。また私は、内閣府の中央防災会議の下に置かれた、中部圏の「名古屋圏広域防災ネットワーク整備・連携方策検討委員会」の委員長でもあります。そうであるのに、これまで自分自身が積極的に、地域活動をしてきたか。誠にお恥ずかしいことながら、地域の訓練に参加したのは去年の「防災の日」が初めてであり、人工呼吸法を学んだのも初めてです。後悔し、反省しています。

大洪水の場合も同じです。3年前の東海豪雨の時、本学で生じた PTSD(心的外傷後ストレス障害)に対する教訓と、前述の大地震への対応を考え、学内組織として「災害対策室」を立ち上げ、訓練に入ったことは皆さんご承知のことです。誤りに気付けば、正すに憚ることなかれであります。身近なところから地域連帯と協力について、一度よく考えてみてください。

言いたいことは沢山ありますが、時間がありません。先を急ぎましょう。

皆さんは「豊かさ」をどのように捉えていますか。「豊かさ」の感じ方は、社会動向を測る一つの基本的尺度だと、私は考えています。特に、第2次世界大戦敗戦後、私たち、つまり皆さんのご両親や祖父母の方々は、とにかく脇目もふらずに一所懸命働いてきました。国民の最大の関心事は、経済的・生活の向上でしたから、物質的な豊かさを目指して懸命に働いたのです。

若い皆さんはご存知ないが、冷蔵庫のひと昔前に、アイスボックスというのがありました。アイスボックス、どう言えましょうかね。とにかく数10センチ四方の箱です。氷屋がちゃんとありまして、そこで氷を買ってきて入れておき



ます。まだ少年だったからビールは飲みませんが、しかしお茶はしっかり冷えるし、果物も冷える。父がアイスボックスを買ってきた時は大変嬉しかった。こんな状態でしたから、ましてや、冷蔵庫が家に入った時は感動しました。

それからテレビです。私が中学生、高校生の頃、初めてのうちは、まだ町内にテレビのある家は一軒か、二軒でしたから、巨人-阪神戦などその家に見せてもらいに行く。私が大学院生ぐらいの時は、いわゆる栃若時代で、相撲が非常に盛んな頃です。大学の中にテレビなんてありませんから、大学近くのうどん屋へ研究室うち揃って行くわけです。もちろん白黒テレビですが、5時ぐらいから放映が始まって、それを見るわけです。人によって違いますが、私はいつも焼きうどんを注文して、一本ずつ食べながらテレビを見る。だから、私は長い間、テレビで相撲を見ると反射的に焼きうどんを思い出すところがありました。後になって、カラーテレビを初めて見た時は本当に感動しました。

働いたおかげで、このような時期を経て、私たちは、物質的に非常に豊かになりました。その経験は決して間違っていたと思いませんし、日本の戦後のポリシーも間違っていなかった。しかし、ふと立ち止まって考えてみると、欲しいものがない程に物質的には豊かになっている、だが何か足りない、本当の意味で「心の豊かさ」を実感できるものはもう少し違うところにあるのではないかと、国民が感じ出している。

一定の経済的・生活向上があってこそ初めてこの種の感覚が生ずるわけであって、遅すぎたと指弾するような問

題ではありません。しかし経済発展の過程で、そのパラドックスとして、産業公害に始まり、広い意味での環境問題、資源・エネルギー・食糧・人口問題、私たちが子供の頃には考えも及ばなかったような人間性の喪失といった重大な問題が生じてきています。人々は、「安全で安心できる社会」、「高齢者や障害者に配慮された社会」、「美しい自然環境」等に、本当の意味での「心の豊かさ」を感じ始めているのです。「豊かさ」に関する認識の変化です。これらのことが、すべて3代、4代先の人たちとの共有財産になることを考えれば、現在を生きる私たちの責任は実に重いと言わなければなりません。と同時に、貧富の如何に拘わらず、「豊かさ」には必ず感動を伴うこと、逆に言うと感動のない所に豊かさはあり得ないことを肝に銘じておきましょう。

お話ししたいことは沢山あります。私がこれまでの人生で出会った素晴らしい人たちのこと、教えられたこと、叱られたこと等々です。しかし、時間的にはもう終わりに近づいてきました。

最初にお断りしましたが、本日は式辞としては少くだけ過ぎたでしょうか。何か一つでも二つでも、皆さんの心に残ったでしょうか。心配ですが、残った、と信じ、かつ期待しています。

最後に当たり、2年前の卒業式で提案した新しいキャッチフレーズを再度提案したい。「ネオ・キャッチアップ」、つまり「新たなキャッチアップ - 負の遺産を超えて - 」であります。戦後の、いわゆる物質的な欧米への「キャッチアッ



プ」の終焉が言われて久しい。一時日本の経済は一流になりかけたがなされず、政治は二流、三流と言われ、環境問題・規制緩和など負の遺産への対応にまだまだ“右往左往している現状”であります。日本流の方法論を“内発的”に考え、実行しなければ、50年、100年先の日本を良くし、世界に貢献しうる、文化的にも尊敬される国創りは難しいと考えます。

名古屋大学は自己改革に最大の努力をしています。皆さん、大学院へ進学する人は教職員と共に、また、社会で活躍しようとする人はそれぞれの分野で“内発的に考える”ことの重要性を忘れずに最善を尽くしていただきたい。最近、本学卒業生の多くから、「名古屋大学の存在感が急速に高まってきた」と言われます。自信を持ってやっていただきたい。

難しいが「凜とした志」があれば出来るに違いありません。柔軟な頭脳と若き肉体でもって、希望に満ちた、明るい気持ちで、人生の新しいスタートを切られることを切に望みます。

以上をもって、卒業生への辞といたします。



来賓祝辞

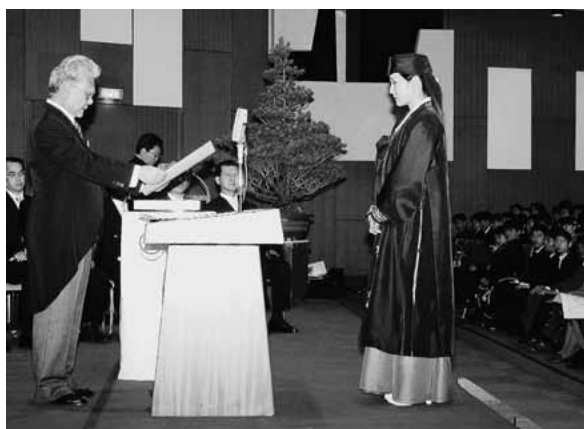
柴田昌治

みなさん、修了式、本当におめでとうございました。前期と後期それぞれ勉学の時間を過ごされ、無事修了されたことに対して敬意を表するとともに、今日からみなさんは全学同窓会の会員になっていただきますので、名古屋大学全学同窓会を代表して心より歓迎の挨拶をさせていただきます。

この全学同窓会は、一昨年10月に松尾総長から、今までの学部別の同窓会をぜひ全学の同窓会にしたいという強いお申し出をいただき、我々卒業生一同がいろいろな意味で検討して発足した同窓会です。トヨタ自動車名誉会長の豊田章一郎さんに会長をお願いしました。これからの大学は社会との連携がますます求められることとなります。今まで大学は社会とのコンタクトという面が不足していました。これからは産学官の連携もそうですが、社会に対していろいろな意味で開かれて、その中に存在意義を見つける大学にならなければなりません。そのためには、卒業生一同がその役割として、大学と同窓会と社会の3つを結びつける絆になればいいというのが全学同窓会の発足の意義です。



少し時間をいただいて、今の日本の問題について話したいと思います。毎年1月にスイスのダボスというところで、世界経済フォーラムの年次総会、通称ダボス会議という会議が開かれます。私はこの会議に毎年出席しており、今年で6回目になります。世界のリーダーが約2500人集まるこの会議では、日本に対する世界の目が段々厳しくなり、しかも残念ながら日本の地位が下がりつつあるという感じがします。また、スイスのIMDというシンクタンクの調査結果でも、国際競争力という視点で見た場合、日本は1995年までは49か国中1位でしたが、1996年からは4位になり、17位になり、20位になり、一昨年はついに49か国中30位という順位になりました。昨年は統計の取り方が少し変わり、30か国中11位という順番になりました。その中身を分析すると、日本の政治のシステムや経済のシステム、大学のシステム、あるいは企業の開業率や企業を新しく起こす力、そういったものがすべて低位にあります。ただ、それでは日本は本当に没落していくのかというと、そうではなく、日本が相変わらず世界の中



でトップを走っているのは研究開発です。つまり、日本がこれからもう一度世界の中で誇りを持って生きるためには、科学技術創造立国ということに力点を置く必要があります。そこで、私はみなさんに3つのことをお話しさせていただきたいと思います。

これからみなさんが社会人になり、グローバルに活動していただくときに、このグローバル社会の中で生きていくためにどうしても考えてもらいたいことは、常にグローバルな視点でものを考えてほしいということです。このグローバルな視点というものは、日本にいたとなかなかそういう感覚が身に付きませんが、世界はどんどん小さくなってきています。従って、常に世界で起きていることを敏感に捉えて考える、それがグローバルな視点でものを考えるということです。

次に、国際人として大切なことは、相手の言ったこ

とをよく理解し、それに対して自分の主張を相手によく伝える、つまり双方向性です。グローバルな視点でものを見て、常に双方向でコンタクトする。いろいろな考えの人がいます、宗教も違うかもしれません。しかし、やはり人間としてお互いの立場をよく理解し合うということをぜひお願いしたいと思います。

最後に、高い志を持っていただきたい。これから日本が世界の中で誇りを持っていくためには、みなさんのような若い人たちそれぞれが、これからの日本のことを考え、高い志を持って生きていただきたいということをお願いして、私のみなさんに対するはなむけの言葉にさせていただきたいと思います。ぜひ胸を張り、将来の日本のため、将来の地球のためにがんばっていただくようお願いして、私の挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。





第 期名古屋大学運営諮問会議 (第4回会合)が開催される

第 期名古屋大学運営諮問会議の第4回会合が、3月11日(木) 委員10名中7名の出席を得て、事務局第1会議室において開催されました。

運営諮問会議は、平成12年4月から国立大学に設置されたもので、学外の有識者の方々を委員に迎え、二期4年にわたり、大学の教育研究目標・計画、自己評価、その他大学の運営に関する重要事項について、総長の諮問に応じて審議し、貴重な御意見・御助言をしていただけてきました。今回の会合が、国立大学の法人化に伴い、最後の会合となることから、松尾総長が委員の方々に、これまでの本学への御協力に対して謝意を述べ、議事に入りました。

会議は、大崎 仁会長(国立学校財務センター所長)

の議事進行により行われ、松尾総長による法人化後の運営組織についての説明の後、第 期に委員からいただいた意見のうち、特に法人化に向けての取り組みについて、各副総長から「名古屋大学の法人化に向けて(最終報告案)」を示しながら、具体的な説明が行われました。続いて、委員の方々から、外部資金からのオーバーヘッド、産学官連携に関する魅力あるマニフェストの立案、学費負担の考え方、法人化後の評価制度と評価組織等について御意見をいただきました。

なお、本会合で承認された運営諮問会議第3回会合の議事録は、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/simon/simon-main.htm>)に掲載されています。



運営諮問会議の様子



説明する松尾総長



エコトピア科学研究機構設立 プレシンポジウムが開催される

エコトピア科学研究機構設立プレシンポジウムが、3月3日（水）、4日（木）の両日、豊田講堂において開催されました。

このシンポジウムは、平成16年4月1日に工学系の6つのセンターと2施設を統合し設置されるエコトピア科学研究機構の設立に当たり、同研究機構で行われる研究内容や地域社会に対して果たす役割について、多くの方々に理解してもらうために開催されたものです。

同研究機構は、人間と自然が調和する豊かな社会を持続的に発展させるための新たな科学技術を創生するため、材料、エネルギー、環境及び情報を中核とする先端的研究課題に取り組み、自然科学と人文・社会科学分野との横断的プロジェクトによる文理融合型の総合研究及び学外の研究機関・研究者との共同研究を行いながら、地球環境負荷を低減した環境調和型循環・再生社会、すなわち、21世紀を目指す理想社会（エコトピア）を実現することを目的としています。なお、エコトピアは、「エコロジー（生態学）」と「ユートピア（理想郷）」の合成語です。

シンポジウムでは、研究機構設立の目的でもある「持

続可能な社会のための科学の役割と産学官および地域連携」をテーマに、松尾総長から本学の現状と課題を踏まえ、研究機構に期待する思いを、架谷理工科学総合研究センター長から研究機構の設立趣旨と目指す方向性について説明がありました。続いて、太田宏次中部経済連合会会長（中部電力会長）、吉川弘之（独）産業技術総合研究所理事長、茅陽一地球環境産業技術研究機構・副理事長、細川昌彦中部経済産業局長、池淵浩介環境パートナーシップ・CLUB（EPOC）副会長（トヨタ自動車㈱副会長）による基調講演が2日間にわたり行われ、研究機構がこの地域をリードし、世界に誇れる研究成果を創出し、研究所設置へと発展していくことへの期待と激励の言葉をいただきました。

2日目の午後には、松井研究機構長予定者（大学院工学研究科教授）や各研究部門の担当者から研究機構における研究計画等について説明があり、特に、研究機構の特色でもある融合プロジェクト研究については、部局の壁を越えた大きな枠組みの中で、学内の研究者が交流し、世界の研究拠点となり得る研究を遂行していくとの説明があり、参加した800名の学内外関係者は、



講演をする松尾総長



講演をする架谷理工科学総合研究センター長



講演をする太田中部経済連合会会長



講演をする吉川(独)産業技術総合研究所理事長



講演をする茅地球環境産業技術研究機構・副理事長

本学に誕生する新しい息吹である「エコトピア科学研究機構」の設立と将来の発展に期待を寄せていました。

〔プログラム〕

3月3日(水)

- ・松尾 稔 総長
「名古屋大学の現状と課題 - エコトピア科学研究機構への期待 - 」
- ・架谷昌信 理工科学総合研究センター長
「エコトピア科学研究機構 - マスタープラン - 」
- ・太田宏次 中部経済連合会会長(中部電力会長)
基調講演「持続可能な社会のための科学と産学連携」
- ・吉川弘之 独立行政法人産業技術総合研究所理事長(前日本学会会議会長)
基調講演「持続可能な社会のための科学の役割」

- ・茅 陽一 地球環境産業技術研究機構・副理事長
基調講演「地球環境問題と今後のエネルギー政策」
3月4日(木)
- ・細川昌彦 中部経済産業局長
基調講演「持続可能な社会のための科学と地域連携」
- ・池淵浩介 環境パートナーシップ・CLUB(EPOC)副会長(トヨタ自動車副会長)
基調講演「地域連携による循環型社会形成への取り組み」
- ・特別企画「オユンナ・ミニコンサート」
- ・松井恒雄 エコトピア科学研究機構長予定者(大学院工学研究科教授)
「エコトピア科学研究機構の考え方」
- ・基幹研究部門の研究計画紹介
- ・融合研究部門の研究計画紹介
- ・エコトピア融合研究への期待



講演をする細川中部経済産業局長



講演をする池淵環境パートナーシップ・CLUB 副会長



「糖鎖」の謎に挑む

北 島 健

糖鎖の魅力と謎 生物を形づくる細胞は物質でできていて、その主要なものは、脂質、核酸、タンパク質、糖質(糖鎖)です。脂質は、それが集合して細胞を外界と区別する境界(細胞膜)を形成します。他の3つは高分子化合物で、それらは生命情報を担う分子として特に重要です。第一は、ヌクレオチドという単位が重合する核酸(DNA、RNA)で、生物の設計図である遺伝情報の本体です。第二は、アミノ酸が重合するタンパク質で、生物を形成し生命活動を実際に駆動させる機能情報分子です。そして第三は、単糖が重合する糖鎖です。糖鎖は細胞の集合化による組織や臓器の形成、外界から侵入する細胞の認識や排除など、いわば細胞社会のコミュニケーションに関わる重要な生命情報分子です。

核酸とタンパク質は単量体が規則正しく直鎖状に配列する構造をもちますが、糖鎖は単量体が多様に連結、枝分かれして配列するなど複雑な構造をもつ分子です(図1)。また、核酸やタンパク質が均一で厳格な構造をもつのに対して、糖鎖は不均一で曖昧な構造をもちます。核酸やタンパク質は、その構造の正確さや高い再現性ゆえに、生物が種を保存しながら子孫を残す上で優良な情報分子といえますが、糖鎖構造がもつ不均一性は、正確さが問われるような情報としては粗悪です。しかし、糖鎖が少なくとも細胞同士のコミュニケーションにおける情報提供分子として機能して

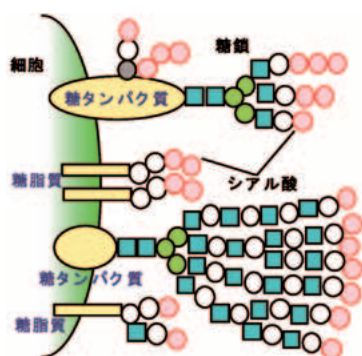


図1 糖鎖は細胞の最外部に存在して、多様な結合様式で連結し、枝分かれ構造をもつ複雑な分子です。シアル酸はその糖鎖の最末端部分に存在します。

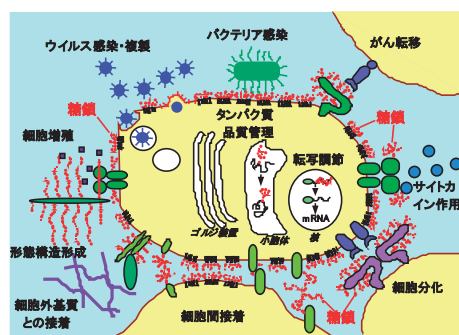


図2 糖鎖が関与する生物学的現象はたくさんあります。しかし、その機能は、まだまだ謎だらけです。糖鎖は赤丸で表してあります。

いることは確かであり、その実体を解明することは重要であると考えられます。図2には、糖鎖が関与する生物学的現象の例をたくさん示していますが、これはまだまだ糖鎖機能のほんの一面を表しているに過ぎません。糖鎖という一見粗悪な情報分子をもつことが、このような生物学的現象においてどんなメリットがあるのかは謎で、この課題は生物学における根元的問題に触れる思いがあります。我々は、このような謎に包まれた第三の生命情報分子の魅力に突き動かされて研究しています。

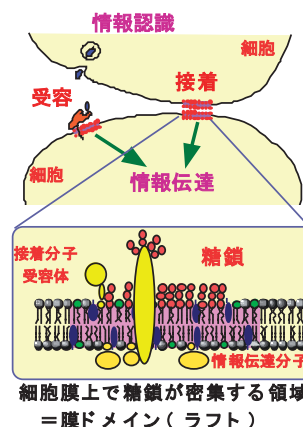


図3 糖鎖が密集する細胞上の領域は、細胞接着や刺激受容の部位を形成しています。



図4 糖鎖研究の同志たち（前左から、矢部、足立、藤田、山田、安川、岩田、後左から、佐藤、原、原田、宮田、朝比奈、山川、薛、不在者として、郷、殷、遊佐、久美田、前田、松本）

私たちのこだわり すべての細胞の表面は例外なく糖鎖で覆われており、その糖鎖の構造は想像を絶するほど複雑で、受精、発生、器官形成（例えば、神経細胞、血球細胞、脂肪細胞、乳腺）、免疫、神経機能などの高次生命現象における様々な過程（細胞間相互作用、情報伝達など）に関与しています。したがって、どのような生命現象を相手にしてもよいわけですが、現在、私たちは2つのことにこだわって研究しています。ひとつは、「ユニークな構造をもつ糖鎖を研究する」ということです。ユニークな構造は、そのきわだった特徴ゆえに意味が捕らえやすいと期待しています。中でも、局在部位、性質、多様性においてユニークな特徴をもつシアル酸という糖に着目しています（図1）。最近では、シアル酸同士が重なり合うジシアル酸構造を特定のタンパク質上に発見し、神経突起形成や免疫細胞の活性化を制御するという新しい現象を見いだしています。もうひとつは、「糖鎖が密集するような細胞上の領域や分子集合構造を研究する」ということです。糖鎖が別の分子と結合する場合、糖鎖が密集して存在するとその結合が増強される性質が知られています。それならば、そのような集合構造を生体内から取り出して、その精密な構造を見て仕組みを知ろうという発想です。この関連で、私たちは、細胞表面に存在する膜ドメイン（ラフト）が細胞接着を媒介する部位として機能すること（図3）を受精と初期発生に着目して研究した成果を、世界に先駆けて発表しました。以上のこだわりを基軸として、私たちの研究室では、現在、以下の4つの研究課題にとりかかっています。（1）細胞表面に存在する膜ドメイン（ラフト）を介する情報伝達における糖鎖の役割の解明；（2）受精、初期発生、免疫、神経機能におけるシアル酸の存在意義の解明；（3）シアル酸の生合成機構の理解；（4）機能性糖鎖の医学的、

工学的、農学的応用分野での利用。

同志とともに 核酸やタンパク質の研究と違って、今、糖鎖研究には指導原理がありません。道なき道を歩くには、学生を含め研究者ひとりひとりが、こだわりをもって、大きな課題に立ち向かうことが大切だと思います。その結果、総力として、謎多き糖鎖という大きな壁を崩すことにつながると信じています。その意味で、研究室のメンバーは皆、志を同じくする同志と考えています。ここに同志を紹介します（図4）。この中から、将来、世界をあとと言わせる大発見をする研究者がでてくることを期待しています。

プロフィール

きたじま けん

1958年生まれ。1987年東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻修了（理学博士）。日本学術振興会特別研究員を経て、1989年東京大学大学院理学系研究科助手。1996年名古屋大学大学院生命農学研究科助教授。2000年同生物機能開発利用研究センター（旧、生物分子応答研究センター）助教授。2004年4月から同センター教授。2003年から高等研究院流動教官を兼任。専門は、糖鎖生物学、糖鎖の生物化学、分子生物学および生物工学的研究。kitajima@agr.nagoya-u.ac.jp、研究室HP <http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/%7ekikan/index2.html>



訃報

飯島宗一元学長逝去

本学第8代学長の飯島宗一名誉教授は、3月1日（月）午前5時45分、胸膜炎による呼吸不全のため逝去されました。享年81歳でした。

同名誉教授は、大正11年11月28日、長野県に生まれ、昭和21年9月名古屋帝国大学医学部を卒業後、本学医学部助教授、広島大学医学部教授を経て、昭和44年5月から昭和52年5月まで広島大学学長、その後、広島大学医学部教授、本学医学部教授、医学部長を経て、昭和56年7月本学学長に就任し、昭和62年7月任期満了により退職されるまで、34年余の永きにわたって、医学の研究、後進の教育指導をはじめとして大学の管理運営に尽力されました。退職後も、愛知芸術文化センター総長、財団法人科学技術交流財団理事長等を歴任されました。

同名誉教授は、この間、病理学の教育・研究に努め、多くの領域にわたり数々の業績を挙げられ、とりわけ原爆症の病理研究の第一人者として、この研究と研究体制の確立に多大な貢献をされました。

同名誉教授は、大学紛争のさなかであった昭和44年5月、広島大学学長に就任され、昭和52年5月までの2期8年の間に、大学紛争の解決や大学の統合移転等に尽力されました。

また、昭和56年7月から昭和62年7月までの2期6年間本学学長として、省資源エネルギー研究センター、遺伝子実験施設等の設置、海外諸大学との学術交流協定の締結の促進、留学生のための日本語研修専門コースの開設、ラジオ、テレビによる放送公開講座の開設等、本学を真の総合大学、地域にも諸外国にも開かれ



在りし日の飯島宗一元学長

た活力ある大学にすべく研究教育環境の整備・充実に努められ、今日の名古屋大学の発展に貢献されました。

同名誉教授は、日本学会議会員、日本病理学会理事、日本網内系学会会長等を歴任し、医学界全体の発展に貢献をされるとともに、中央教育審議会委員、臨時教育審議会第四部会長等の要職を歴任し、我が国の文教行政にも多大な貢献をされました。さらに、21世紀を考える中部圏会議会長、愛知県中等教育問題研究協議会座長等多くの学術教育関係の委員、役員を歴任し、地域の活性化、学術文化の向上発展に寄与されました。

ここに飯島元学長のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。



遠山前文部科学大臣が本学を視察

遠山前文部科学大臣は、3月4日(木) 本学を訪問し、松尾総長との懇談後、本学を代表する先端的な研究を行っている二つの研究施設等を松尾総長とともに視察されました。最初に、平成15年度21世紀 COEプログラム採択拠点「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」のサブリーダーである福田敏男工学研究科教授(マイクロシステム工学専攻)の研究室を訪れ、同教授から情報知能ロボットシステムや生命情報医療システム等について説明を受けました。



福田研究室を視察する遠山前文部科学大臣

続いて、平成14年度「新世紀重点研究創生プラン～リサーチ・レボリューション・2002(RR2002)」のナショナルバイオリソースプロジェクト「メダカ遺伝資源の収集・保存・提供・情報発信と保存技術の改善・普及」の中核機関に選定された生物機能開発利用研究センターのプロジェクト代表者である若松佑子教授(開発・展開部門)の研究室を訪れ、同教授から半世紀を超える本学のメダカ研究の象徴である透明メダカを突然変異体系統(突然変異に起因する遺伝的性質を



若松教授から説明を受ける遠山前文部科学大臣

もつメダカを「系統」とよぶ)として確立し、透明メダカを含め、同センター内の約1400個の循環式水槽と屋上の水槽で飼育されている120系統のメダカを全国の研究機関に提供している等の説明を受けました。

最後に、現在整備中の野依記念物質科学研究館及び野依記念学術交流館を訪れ、担当者から工事の進捗状況について説明を受け、今回の視察は終了しました。



野依記念物質科学研究館の屋上から東山キャンパスを眺める遠山前文部科学大臣



博物館が平成15年度 地域貢献特別支援事業を実施する

博物館は、平成15年度地域貢献特別支援事業「名古屋大学博物館と地域の博物館等との連携によるジュニア・キュレーターの育成」として、「天体望遠鏡教室」と「地球教室」を実施しました。

この事業は、名古屋市科学館と連携して、「理科離れ」「自然離れ」した小中学生を対象に、“創造的探求心”と“健全な自然観”をもち、“モノ”を見て考えることのできる若者（ジュニア・キュレーター）を育成し、人材育成で地域貢献を果たすことを目的として実施されたものです。

天体望遠鏡教室は、1月31日（土）、名古屋市科学館において行われ、参加者は、最初に、プラネタリウムで、同教室の主旨説明と冬の星座の特徴に関する解説を受けた後、小型天体望遠鏡（口径5 cmの屈折望遠鏡）の原理と操作法の習得に挑みました。明るいプラネタリウムの中での実習に加え、一組の親子に1名のサポートスタッフが配置されたため、参加者は比較的短時間で天体望遠鏡の操作法の基本を習得することができました。続いて、科学館の屋上で、金星・土

星・木星・月・スバルを対象に、暗闇の中で天体望遠鏡の操作法の実習を再度行い、試行錯誤の末、自分の力できれいな輪をもった土星を見つけることができた時には、大きな歓声が上がりました。

また、地球教室は、2月29日（日）、3月6日（土）、3月7日（月）の3日間の日程で行われ、小学5年生から中学3年生までの35名が参加しました。2月29日に名古屋市科学館で行われた事前学習会では、岩石や化石の出来方、化石から何が分かるかについて解説が行われました。3月6日の現地学習会は、瑞浪市で実施され、土岐川の河床で地層観察と化石採集を行いました。時折り雪が舞う寒い天気にもかかわらず、ほとんどの参加者が休憩も取らず、3時間以上化石採集に熱中していました。また、3月7日に博物館で行われた事後学習会では、前日に採集した貝や木の葉の化石を小刀できれいにクリーニングする作業に挑戦しました。なお、参加者が採集した化石は、博物館のジュニア・キュレーターコーナーで、3月17日（水）から約1ヶ月間展示されています。



小型天体望遠鏡の操作に挑む参加者



化石のクリーニングを行う参加者



公益信託田島毓堂語彙研究基金が設立される

田島毓堂(いくどう)名誉教授(大学院文学研究科)は、3月22日(月)UFJ信託銀行を受託者とする「公益信託田島毓堂語彙研究基金」の設立を、文部科学大臣から許可されました。

この基金は、正法眼蔵・伝光録、法華経訓読史、語彙研究を専門とし、比較語彙論等で多くの論文を発表している田島教授が、本学を定年退官するのを機に、語彙研究に対する研究助成及び優れた業績に対して顕彰を行い、語彙研究のさらなる発展に寄与するために設立したもので、研究助成金の給付は、年間1～3件、総額50万円、顕彰の授与は、年間1件、50万円を予定

しています。また、語彙論等の講座を有する全国の国公立大学及び研究機関等に募集要項を送付し、公募することにしており、応募資格は、大学・大学院の教員又は大学院博士課程に在籍する学生若しくは語彙研究基金運営委員会が認める者で国籍を問いません。

なお、問い合わせ先は、語彙研究会代表 田島毓堂 (E-mail: iktjam@sage.ocn.ne.jp、FAX: 052 - 571 - 8713)又はUFJ信託銀行名古屋支店財務相談部/精木(あべき)・石井(〒460 - 8660 名古屋市中区錦3 - 21 - 24、TEL:052 - 211 - 3411、FAX:052 - 239 - 5866)です。



田島名誉教授



田島名誉教授が執筆した語彙論の論文集等



太陽地球環境研究所が 陸別町と社会連携連絡協議会を開催

太陽地球環境研究所は、2月27日（金）北海道陸別町と社会連携連絡協議会の第3回目を開催しました。

この協議会は、同研究所が観測施設を設置している陸別町と昨年3月に地域貢献を目的として設立したもので、今回は、同町との間で昨年3月から今年の2月まで実施した1年間の連携事業の総括と今後1年間の事業活動について話し合われました。

協議会には、本学から上出研究所長、根津事務長等の研究所メンバーと大学全体の地域貢献を担当する松川企画広報室長（平成16年度から大学全体の地域貢献については、研究協力・国際部社会連携課が担当）等8名、陸別町から金澤町長、田中助役を始めとして町の責任者5名が出席し、昨年の事業活動として行われた小・中学校へへの出前授業、町民への講演会やオーロラの町として有名な同町にふさわしい冊子ガイド

ブック「オゾン40のなぞ」の作成等が報告され、今後もこうした活動を継続して実施することが確認されました。また、同町が設置している「銀河の森天文台」を中心に開催される行事への協力についても検討され、協力が確認されました。地元報道機関も会議に出席し、本学と陸別町との貢献事業の話し合いを熱心に取材していました。

なお、この貢献事業は、北海道では報道機関にかなり注目されており、昨年は貢献事業の一環として開催された講演会等に、NHKや地元新聞社が後援するとともに広く報道されました。また、研究所と町で協力して作成しているガイドブックは既に4冊を超え、わかりやすい冊子と好評で、他の研究機関から引用したいという依頼が多数寄せられています。



協議会の様子



博物館が「おもしろ博物学 ～東海から学ぶ～」を開催

博物館は、名古屋市千種生涯学習センターと共催で、平成15年度第 期冬の主催講座「おもしろ博物学～東海から学ぶ～」を1月28日(水)から3月3日(水)まで6回のコースで博物館講義室において開催しました。

講座は、下記のような内容で行われ、定員を上回る応募者の中から抽選で選ばれた37名の受講生が、毎回ほとんど欠席もなく、博物館専任教員の話を中心に熱心に聴講しました。

- 1月28日 出土資料から昔の食生活を考える
(新美倫子助教授)
- 2月4日 岩石と鉱物と化石～どうして岩石は硬いのか、なぜ化石はできるのか～
(吉田英一助教授)
- 2月18日 東海地方の植物たち(西田佐知子助手)
- 2月25日 地質と地名から濃尾平野(名古屋)の生い立ちを考える(足立博物館長)
- 3月3日 伊勢湾・三河湾の海とそこに棲む生き物
(西川輝昭教授)
- 〃 ニワトリの動物学と名古屋大学
(蛭薙観順助教授)

同センターが実施した受講者へのアンケートでは、回答者の大多数が「よかった」と評価し、「大学講座なので難しい話かと思っていたが、とてもわかりやすくてよかった」、「先生方が熱心で、たくさんの資料をそろえていただき感謝している」、「身近な内容が含まれ、一層よく理解できた。実際に地図をもって古木曾川の左岸を歩いてみた」といった感想も寄せられました。



講義をする吉田助教授



法人化に向けての準備状況に 関する説明会が開催される

法人化に向けての準備状況に関する説明会が、3月5日(金)豊田講堂において、約300名の教職員の参加を得て開催されました。

この説明会は、国立大学の法人化を目前に控え、組織改革検討委員会の下に設置された法人化関連の各小委員会(目標・計画・評価小委員会、組織・運営小委員会、人事・労務小委員会、財務・会計小委員会、附属病院小委員会)で現在までに検討された主要な事柄を全学の教職員に向けて説明するため、各小委員会を総括する法人制度検討小委員会が中心となり開催されたものです。

当日は、奥野法人制度検討小委員会委員長(副総長)の司会進行の下、中島組織・運営小委員会委員(副総長)佐々木人事・労務小委員会委員長(副総長)江崎財務・会計小委員会委員長(大学院国際開発研究科長)及び松尾附属病院小委員会委員長代理(医学部附属病院院長補佐)から法人化に向けて検討された課題、決定された事項等について説明がありました。続いて行われた参加者との質疑応答では、人事・労務の分野を中心に法人化後の制度に関する数多くの質問、意見が出され、法人化後も引き続き検討が必要な運営上の課題に関する貴重な意見収集の機会となりました。



左から、中島副総長、佐々木副総長、江崎国際開発研究科長、松尾医学部附属病院院長補佐、奥野副総長

 INFORMATION 

イベント等の開催予定一覧

イベント	日時	概要	連絡先
第7回博物館特別展	3月17日(水)~7月30日 (金)10時~16時	テーマ：名古屋大学の研究・教育を支えた 匠の技 場 所：博物館 休館日：月・火曜日 ただし祝休日は開館	博物館事務室 052-789-5767
2004年春季附属図書館特別展	3月23日(火)~4月21日 (木)10時~17時(3月25 日は休館)	テーマ：和歌(うた)の書物 - 新古今和歌 集とその周辺 - 場 所：附属図書館展示室	附属図書館情報管理 課庶務掛 052-789-3667 附属図書館研究開発 室・秋山助手 052-789-3697
2004年春季附属図書館 特別展ギャラリートーク	4月17日(土)13時~15時 (予定)	テーマ：新古今和歌集とその時代 場 所：附属図書館多目的室 講 師：田中喜美春文学研究科教授、島田 修三氏(歌人、愛知淑徳大学教授)	附属図書館情報管理 課庶務掛 052-789-3667 附属図書館研究開発 室・秋山助手 052-789-3697
第7回博物館特別展開連講演会	4月22日(木)15時~16時 30分	テーマ：名古屋大学の匠の技 その失敗と 成功 場 所：博物館講義室 講演者：増田志志理学部技術部第一装置開 発班技術班長	博物館事務室 052-789-5767
中学生のためのネイチャーウォッ キング	5月8日(土)	野間海岸にて野外実習(一般公募)	博物館事務室 052-789-5767
博物館野外観察園見学会	5月8日(土)	場 所：野外観察園 対 象：一般	博物館事務室 052-789-5767
第7回博物館特別展開連講演会	5月20日(木)15時~16時 30分	テーマ：地質年代学の最前線を支える石工 技術 場 所：博物館講義室 講演者：鈴木年代測定総合研究センター長	博物館事務室 052-789-5767
第7回博物館特別展開連講演会	6月6日(日)14時~	テーマ：生きている金属 場 所：博物館講義室 講演者：井村 徹名誉教授(工学部)	博物館事務室 052-789-5767

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部 総務広報課 広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

本学の東山キャンパス用地は、名古屋帝国大学が創設された1939年に取得されました。そして、1942年4月から6月にかけて、工学部と理学部が東山キャンパスへの移転を行っています。その当時は、四谷通を挟んで、西側（写真1の①）部分に工学部校舎、東側の高台（写真1の②）部分に理学部校舎が建てられていました。また、理学部校舎の南側（写真1の③）部分には「東山運動場」がありました。

名大史ブックレット2『名古屋大学 キャンパスの歴史1』において紹介されていますように、本学東山キャンパスには「緑のトンネル」と呼ぶことができる道があります（写真2）。この「緑のトンネル」は、四谷通三丁目交差点から四谷通沿いに少し南へ進んだ所へ入口があり、そこから工学部5号館・環境総合館、理系食堂・グリーンサロン東山を経て、農学部校舎へと抜けています（写真1の④部分）。

この「緑のトンネル」は、東山キャンパス整備以前の耕地区画整理の際に作られた道で、本来は鏡池の北側から学生会館の南側を通る道（写真1の⑤部分）から続く道でした。当時、この道には樹木がほとんどありませんでしたが、初代渋沢総長による「緑の学園」構想に基づき、植樹が進められたのでした。写真3には、高台に建てられた理学部校舎の手前に、植樹されて間もない樹木（＝「緑のトンネル」）がみられます。

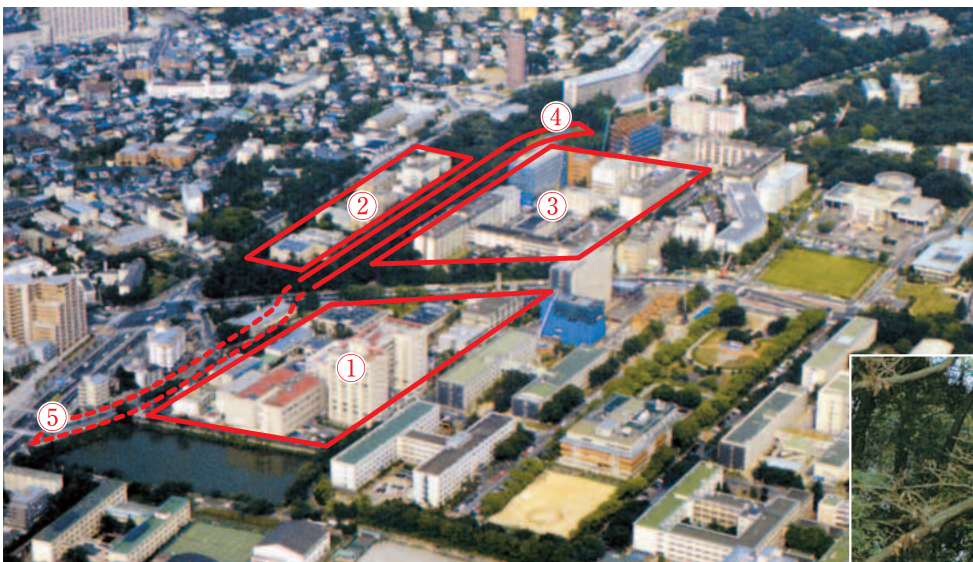


写真1：東山地区航空写真



写真2：「緑のトンネル」



写真3：1942年当時の東山キャンパス

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、
大学文書資料室（052・789・2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。